

大人と子どもの“見える”について
— 創造的主体のための図書館 —

21819014 亀田鈴香
指導教員 宮晶子 准教授

中動態 見える 見る
俯角・仰角 子ども 大人

1 制作の背景と目的

お地蔵さんを指さして「にゃんにゃん！」と言う子どもに対して、大人は冷静に「これはお地蔵さんだよ」と教え、手を引いて子どもを先へと歩かせる。大人は子どもが感じている世界を知ろうとはせず、1つの正解を押し付けている。この姿から大人は子どもの頃感じていた興味・好奇心をなくしているのではないかと感じる。

このような現象が起きてしまう原因を、“見える”という中動態の状態から考察することで、未来の子ども達の創造性を育み、裾野を広げ、大人自身も固定観念から逃れ、創造的主体として感受することのできる建築を設計することを目的とする。

2 中動態の“見える”

『芸術の中動態 受容/制作の基層』では関矢幸雄の『トランク劇場』が紹介されている。この作品では、“見える”を体験することができる。トランクの中から、紐、紙、棒といった身近なものを出し遊び始め、それらがやがて演劇的表現に繋がるといった構成である。見る者の目の前で、身近なものが演者の活動によって花や馬に見えるようになって行く展開は、“見える”という体験によって見る者の心を動かしている。

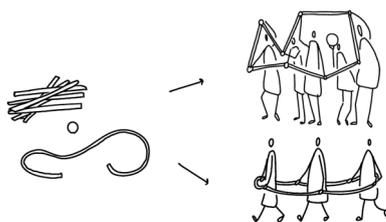


図1 トランク劇場

このように、“見える”とは、能動態の“見る”、受動態の“見せられる”とは異なる中動態の感覚である。“見える”とは、「視覚に入った“もの”と今までの“経験”を直感的に組み合わせ再解釈した状態」と定義する。“見える”は、決められたルールや指示通りに動くのではなく、自分自身のために概念間の関連性や関係を発見しようとする積極的な発想でもあり、大人になってからも重要な感覚である。

2-1 私の“見えた”体験

私が“見えた”と感じた瞬間を写真に撮り、それらが視覚的にどのように作用しているのか考察する。



写真1 写真2 写真3 写真4

これらの写真は推測していた景色が裏切られた瞬間、そして視界が開けた瞬間だという共通点がある。このようなときに大人も、その場を再解釈が必要になるのだ。大人になっても一定のシークエンスが続いた後に急激に視界が開ける瞬間を作ることによって、“見える”体験が生まれる可能性があるのではないかと感じる。

2-2 経験量と“見える”

人間は経験を積むと経験則によって推測して見るようになる。そのため、“見える”という状態が自分の中に内在したままショートカットして“見る”に繋がるように成長していく。そして、大人は子どもの頃の“見える”という感覚に戻れなくなり、子どもに寄り添えず、子どもの“見える”機会を奪うのである。創造性を育むべき時期である子どもの“見る”が凝り固められてしまい、それをまた未来の子どもに押し付けるのである。



図2 子どもから大人へ

2-3 大人と子どもの視界の違い

子どもから大人へと、運動機能や身体スケール、視覚の発達によって、俯角・仰角が大きくなったり見える距離が広がる。成長と共に新たに見えるようになるものがある一方で見えなくなるものがある。このように視界が異なることで、直感的に“見える”世界も異なってくる。



図3 視界の違い

3 “見える”と配架構造

大人が“見る”から“見える”に変わることによって多様な“見える”を許容できるようになり、子どもは押し付けられることなく“見える”ままに本を選び取り滞在できる。そのような“見える”図書館を中核とした複合施設を設計する。

図書館には、同じ目的で大人も子どもも等しく訪れる。大人は知識の収集をするために目当ての本を探し読んでいる。しかし、子どもはジャンルを問わずに背表紙からどのような本なのか直感的に感じ取って発見的に選び、読んでいる。子どもの読書は“見える”という状態が表れており、この姿には“見える”という感覚を取り戻す可能性が潜在していると考えられる。しかし、現在の図書館は番号や対象年齢でエリア分けされているため、大人が子供のように“見える”という感覚で本を探索し滞在する可能性が消えている。そこで“見える”ようになる視覚的な建築操作を図書館に落としこむことで、図書館を再編成する。

大人はこの施設で探索しているうちに子供の頃のような感覚を取り戻し、自らそれぞれの“見える”感覚で本を選び取り居場所を見つけ滞在するようになる。そして知識の収集としての学びだけではなく積極的な学びができるようになる。やがて、見方がほぐれた人が裾野を広げ固定観念から逃れ、この土地の魅力を再解釈するようになる。

4 敷地

会社員や学生といった多様な人が流入している場所では、お互いのコミュニティがまじり合うことはなく互いに断絶した場が広がっている。中でも日本で最も昼夜人口比率が高い千代田区に着目し、学校やオフィスビルが立ち並び訪れる人の多い駅前、かつ大人のいるビル街と子どものいる公園の間に位置する場所として、市ヶ谷駅前の一角を敷地とする。ここは、江戸城の外濠の下では地下鉄が通っており、歴史が練り込まれているような場所でもある。

5-1 ねじれ螺旋構造の全体

動線を伴う螺旋状のものが交錯しながら繋がる構成とする。(図4) この構成により、先を見通すことができない連続した風景が続きつつ、交錯した部分で突然見る者の目に他の人の活動が映り、“見る”から“見える”に変化する。そして順路が一つに限られることなく“見える”という導きに従って探索することができる。

5-2 交錯地点

交錯地点では、椅子、机、床、天井がぶつかり合う。俯角・仰角や視界の範囲が違ふことで、大人と子どもで“見える”要素が変わり、それぞれ違うところへ導かれていく。そこで、身体スケールを考慮して床を交錯させたり、子どもが導かれたりするような居場所を設ける。同じ目的を持ちこの図書館を訪れたはずなのにそれぞれが違う場所に滞在する姿は、今まで正しいと思っていた“見る”を疑い視覚情報を再解釈させていく。(図5)

5-3 交錯するまでのシーケンス

交錯地点で突然予測が裏切られるようにするために、この先も同じものが続いていると推測させるようなシーケンスが重要になってくる。本棚は本を保管する以外に、視界を遮るという特徴がある。歩みを進めるにつれて次々と本棚が立ち現れるようにリズムをつくりながら配置することで交錯するまでのワクワク感を作る。(図6) 本棚の高さは、ねじれ螺旋構造による体験を増幅するように変化する。また、本図書館の配架構造(図7) である本のカテゴリーを放射状に、大人から子どもを中心から外縁にむけて、本棚の配置は反応し、大人と子どもの多様な“見える”をつくり出す。

“見える”ようになった人々は主体的な観察と反応を始め、大人も子どもも、一人一人が思い思いに滞在し共存する。

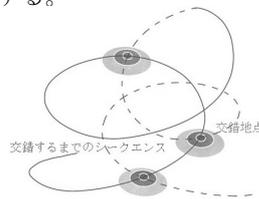


図4 ねじれ螺旋の交錯

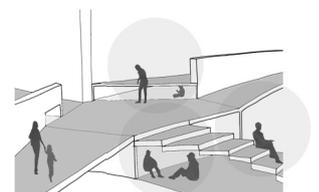


図5 交錯地点

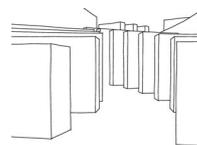


図6 本棚の連続

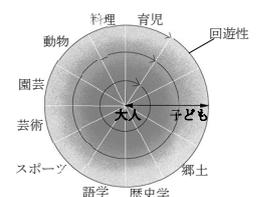


図7 配架構造

主要参考文献

- (1) 森田亜紀：『芸術の中動態 受容/制作の基層』，萌書房，2020年。
- (2) 藤田一郎：『「見る」とはどういうことか 脳と心の関係を探る』，化学同人，2012年。
- (3) 岡潔：『春宵十話』，光文社文庫，2019年。
- (4) 空間認知の発達研究会：『空間に生きる 空間認知の発達研究』，北大路書房，2010年。